

三上一夫先生の幕末維新史研究について

本川 幹 男

はじめに

本稿は昨二〇一四年一月二二日に実施された、第一七回福井県史研究大会（於、福井県立こども歴史文化館）において本テーマで発表した内容を、そのときのレジュメと資料をもとにまとめたものである。ただし、一部順序の入れ替えや修正を行い、また新たに付け加えたところがあることを断っておく。

三上一夫先生は昨年七月二八日に逝去された（享年九十二歳）。一九二二年朝鮮京城府に生まれ、戦後になって両親の出身地福井に住まわれたそうである。教育界に身を投じられたわら、近世・近代史の研究に邁進され、多大の成果を挙げられた。晩年にはご家庭の事情から東京に移られたが、最後まで研究への情熱は衰えなかったとお聞きする。ご冥福を心からお祈りする次第である。

継承発展できるかを考えることを目的とする。もともと、筆者には先生の全業績を見通し、理解する力はない。よってここでは関心のある福井の幕末維新史を中心に見ていくこととする。

なお、先生の研究業績については長野栄俊氏による詳細な報告が「三上一夫先生 略歴・業績目録」と題して本誌に掲載されている。よって本稿ではこれに全面的に依拠し、引用等については、単著はその番号、論文等はそれらの分類と発表年月を用いた。出版元や所載誌、及びその号数等は省いた。また、できる限り学問的な見地に基づきたく、以下、三上先生をはじめ研究者名には「氏」を付け、他の敬語・丁寧語等は原則省略した。

一 多大の研究業績

三上氏の研究業績を考えると、第一に驚くのは精力的な執筆活

動である。一九五三年、三十一歳で県立藤島高校の教壇に立つや、間もなく同校百年史の編さんに関係したのが始まりではないかと推察する。ただし直接歴史研究の論文を発表するのは、福井商業高校に転勤して後の六〇年代後半、四十歳代半ば以降のことである。六六年「橋本左内の洋学観」を皮切りに、同年更に左内関係を二本出し、翌六七年には生涯の中でもっとも多い一〇本も発表した。それ以降は各年一〜四本に終始する。やがて七四年、新書版ながら初の単著①『幕末の越前藩』を刊行し、五年後の七九年には②『公武合体論の研究―越前藩幕末維新史分析―』発刊にこぎつけた。その後も発刊が相次ぎ、二〇〇四年、八十二歳までに単著一二冊、編著五冊を出版した。またそれらとは別に、長期間編集・執筆に責任ある立場で携わった福井県史（近現代史部会副部会長）福井市史（近現代史部会部会長）・教育史などの自治体史関係の刊行物も随分の数になる。

更に生涯に発表した論文数が七七本、それに歴史関係の講演・対談、書評・新刊紹介、あるいは一般読者を対象にした読み物や随想等は枚挙に暇がない。以下、研究発表物について年代を追い少し具体的にしておく。

一九六〇年代

論文発表が始まった六〇年代後半のテーマはおよそ二つに集約できる。一つは幕末の福井藩に関するもので、橋本左内・由利公正の思想や政治活動を主とする。共に支配の立場から福井藩の藩政改革と対外危機にどう対処したかを、藩主松平慶永（春嶽、以下「春

嶽」で統一する）や横井小楠を含めて論じ、維新変革につながるこれらの思想的・政治的役割を高く評価した。いま一つは、明和六年（二八六八）の福井藩百姓一揆と明治六年（一八七三）の越前「護法一揆」である。民衆運動に焦点をあて、明和一揆は福井藩政を質的に転換させ、また護法一揆では専制的な明治新政と対決したとその意義を強調した。この時期、二つのテーマは並行して進んだことになる。

一九七〇年代

この時期の論文数は、公務が多忙のためもあってか年に一、二本と多くない。けれども研究は進み、七四年、五十二歳で前述の①『幕末の越前藩』を上梓した。新書版で市民向けながら、幕末福井藩を初めて通史的にまとめた労作である。

ところで、この時期には福井藩の文久三年（一八六三）挙藩上洛計画やその後の長州出兵問題、松平春嶽と勝海舟との関係など、福井藩を中央政治と関わる研究が進んだ。その結果、これらと前代の研究をまとめて刊行したのが先の②『公武合体論の研究』である。幕末の福井藩が改革を通して「雄藩」として台頭し、維新変革に公武合体論によって独自の役割を果たしたことを論じたものである。

一九八〇年代

この時期、三上氏は福井県教育研究所長を最後に大学に職場を移し、研究面でも新たな飛躍をとげた。それには直前の七八年から福井県史、八一年に福井市史が始まり、両自治体史の近現代史部会を指導し、調査から執筆にいたる重責を担うようになったことが大きい。研究範囲は一挙に昭和期まで拡大したが、積極的にテーマを

設定して取り組んだ。

かくして新たな成果を次つぎと発表していった。この一〇年の間に『福井県史』資料編近現代十―十二が公刊されるが、それらと並行しつつ、⑥『日本近代化の研究』、⑦『明治初年真宗門徒大決起の研究』、⑧『日本近代化と真宗地帯の研究』、と三冊の著書出版する。他にも八二年④『福井藩の歴史』、八五年⑤『福井県教育史』があり、また論文は明治前期と昭和前期を中心に毎年二―四本に及んだ。驚くべき仕事ぶりである。

しかもこの時期が終わった一九九〇年には③『公武合体論の研究「改訂版」』の刊行に踏み切った。前著②について一部章節の削除や増補を行ったもので、より明確に明治維新史の研究書として世に問う構成となった。

一九九〇年代

九〇年代に入ると出版の勢いは弱まる。だが、精力的な研究は相変わらずであった。この時期、福井県史は資料編を終えて通史編に入り、福井市史は資料編三巻を次つぎと刊行していた。三上氏はそれらをこなしつつ、更に新たな目標に進んだ。研究を始めた当初から注目してきた横井小楠思想の本格的な研究である。実際、発表論文のテーマのほとんどは小楠に関わっている。その結果は九六年⑩『横井小楠の新政治社会像―幕末維新変革の軌跡―』に結実し、また市民向けに九八年『横井小楠のすべて』、九九年⑪『横井小楠―その思想と行動―』の発刊となった。これには九四年に発足した全国横井小楠研究会へ参加したことも大きかったようだ。

二〇〇〇年以降

二〇〇二年、氏は八十歳を迎え、さすがに無理はできなくなってきたかも知れない。それでも前後の九七年から〇一年にかけ、横井小楠・松平春嶽・由利公正の各「すべて」と題する編著に尽力し、〇四年にはやはり市民向けながら力をこめた⑫『幕末維新と松平春嶽』を出版する。しかし、これを最後に単著は終わりを告げた。その後も論文発表は続くが小品が主で、テーマも特に定めてはいなかったようだ。

二 『公武合体論の研究』について

すでに明らかのように、三上氏の業績は多岐にわたり、論著も大変多い。しかし、主著を挙げるなら前掲の②『公武合体論の研究―越前藩幕末維新史分析―』になるだろう。本書はそれまでの福井藩政、とりわけ幕末の福井藩史を可能な限り史（資）料を集めて分析しまとめたもので、明治維新に関わる初の本格的な研究書である。その基本視角として氏は次の五点を示した（序言八ページ）。

一、深刻な財政難にあえぐ藩政がいかにして「雄藩」への端的契機をつかむことができたか。

一、藩政改革派によって、早期的にいかなる開明的論策が画策され、それが藩政改革においていかに具体化されたか。

一、全国的統一国家への変革過程のなかで、中央政局に対していかに公武合体路線を実現しようとしたか。

一、幕末維新时期を通じていちずに公武合体路線の追求に終始し得た歴史的、社会的背景はいかなるものであったか。

一、明治維新政権の創出に当たり、公議政体路線がいかなる重要な歴史的役割を果たしたか。

これには氏独自の維新史研究を整理した上での問題意識があった。当時（六〇年代）、明治維新の研究では国際的契機と国内的契機をめぐる論争が注目された。氏は前者の外圧への対応を重視し、当時の日本が半植民地化の危機にどう対応し、統一国家を形成しえたかを説明することが課題だとした。

本書はこのような観点に立ち、全体を第一篇と第二篇に分け、次のような構成である。

序言

第一篇 藩政改革路線とその影響

第一章 藩財政窮迫化の実相

第二章 「雄藩」推転への胎動

第三章 軍制改革と強兵策の展開

第四章 「重商主義」的藩論の形成

第五章 「民富論」的富国策の推進

第六章 統一国家論具体化の画策

第二篇 公武合体路線とその展開

第一章 文久期幕政改革の推進

第二章 張紙、檄文等に見る尊攘派の動向

第三章 越前藩の挙藩上洛の計画

第四章 第二次征長への反応、その動向

第五章 維新への公議政体論的対応、その挫折

結論

第一篇第一章は、藩財政の窮乏と領民が起こした明和五年百姓一揆を取り上げ、矛盾の激化と藩の反動的対応を扱う。第二章は天保期に飛び、新藩主慶永の下で改革派が出現し、それが「雄藩」に飛躍する契機を生んだと評価する。そして天保・弘化期を中心とした農民層分解や商品経済の進展と藩の専売制を考察し、次の本格的な改革に期待を向ける。第三章は外圧に対応して洋式軍制の整備を目指すものの、藩単位では限界があるとして「雄藩」が連合した統一国家に向かうことを示唆した。第四章は橋本左内の積極的開国通商論と、民富を基礎に国富を図る横井小楠の殖産興業策をつなぎ、藩の重商主義策が確立されるとする。第五章はその重商主義策に焦点をあて、安政期藩政改革が民富に基づく富国策に向かい、藩による絶対主義への傾斜が始まるとした。こうして第六章では、福井藩は統一国家像を「雄藩」大名連合政権として構想し、まずは將軍継嗣に関わる一橋派として政治の舞台に躍り出たとする。

第二篇は福井藩が統一国家を目指し、公武合体策を強力に推進する政治運動に重点が置かれる。具体的にはまず第一章、次に第三章が重要である。松平春嶽が文久二年に政治総裁職に就任し、政治顧問の横井小楠と共に幕政改革を進め、翌年夏には春の上京失敗を踏まえ挙藩上洛を計画した。だが、この計画は挫折し、藩内の横井小楠を中心とする積極的改革派は追放された。春嶽は政権を立て直し、

再び公武合体論の立場で運動を進める。けれども、その後も公武合体派は尊攘派との対立をめぐって内部分裂が繰り返されたと説く。第四章はそれを第二次長州出兵問題を通して論じ、春嶽はこれを内戦の危機とみたとする。よって第五章では土佐藩と共に大政奉還を画策し、公議政体論を基調とする新政権の実現に尽力した。その結果、倒幕派に敗れはするが、一定の成果を生み、由利公正に代表される五箇条の誓文や財政策につながったと結論づけている。

このように、本書は、福井藩が藩政改革を成功させ、維新変革に公武合体・公議政体路線をもつて加わり、大きな役割を果たしたと評価する。限界はあるが倒幕派路線に対抗する「パラレル」な存在感を持ち続け、その役割を果たしたと論じ切った。

ところで、本書は、初版から一二年後の一九九〇年、改訂版に変えて再発行された。基本的な視角や展開方法は変わらないが、章節の構成はかなり改められている。すなわち、第一篇で第一章と第四章、及び第二篇の第二章が削除され、両篇とも四章構成となった。また第二篇第五章の五・六節を削除し、改訂版には新しく五〜十節を加えた。

改訂の理由は、「あとがき」によると、初版刊行以後の福井県史や福井市史事業の開始により、福井県近現代史への関心が深まった結果という。とりわけ明治六年「越前護法大一揆」や「越前地租改正反対運動」「越前自由民権運動」といった越前の「民衆層の動向」を詳細に検討する中で、「越前藩」の「公議政体路線」の「歴史的品格」を再検討すべきと考えたからとのことである。実際、八〇年代は近

現代史に没頭し、先述したように三冊を発刊していることから頷ける。

注意したいのだが、これらの研究に共通するのは、日本の近代化、とりわけ「上から」の「近代化」に対抗する「下から」の「近代化」への着目である。⑦『明治初年真宗門徒大決起の研究』はそのことと関わり、ここでは一揆側の攻撃対象の分析から、百姓一揆の性格を示す「世直し型」と「惣百姓型」の双方を併せ持つとし、「下から」の「日本の近代化」に向き合う民衆運動だとみなした。したがって氏にとって本書の意義は大きく、その「あとがき」では『公武合体論』の「姉妹本としての性格をもたせたい」と語っている。両者相まって越前が目指した「近代化」の道筋を統一的に把握できると確信したことになる。

三 横井小楠の思想研究、他

一九九六年出版の⑩『横井小楠の新政治社会像―幕末維新変革の軌跡―』は、三上氏の研究が新たな段階に到達したことを示す著作である。横井小楠については、研究を開始した六〇年代から橋本左内や由利公正と関わり取り上げ、六七年には論考「横井小楠の富国策」を発表した。したがって小楠は当初から主要な研究対象であった。主著『公武合体論の研究』では、福井藩の「民富論」に基づく殖産興業策、文久期の幕政改革推進、同三年の挙藩上洛、公議政体論等を扱った各章で、いずれも小楠の思想と政策論を主軸に展開している。

けれども、これらはいくまで幕末の福井藩史や公武合体運動に主眼を置いていた。今度は正面から小楠と向き合ったのである。

これには熊本でかれを再認識し顕彰しようとする声が高まってきたことも大きかった。その後九四年には(全国)横井小楠研究会が発足し、氏も発起人の一人として参加する。こうして小楠への全国的な関心が深まる中、本書の刊行となったわけである。

本書の課題は「小楠の目指す政治社会・経済像にかかわる思想と行動の軌跡、それに彼の門弟への著しい影響力に焦点をしばって検討」(序章)することであった。構成は序章と一〜九章及び終章を加えた全一章からなる。これらを恣意的ながら更にまとめると次の通りである。

- ① 小楠思想研究の深化(革新性)
- ② 幕末期、福井・熊本両藩の藩政改革への対応と異同性
- ③ 開国論、露・英観、海軍設立論等に関する小楠論と福井藩論の進展
- ④ 文久二年小楠の「国是七条」による幕政改革の意義と攘夷論激化への対応
- ⑤ 文久三年福井藩の「挙藩上洛計画」と小楠の「公議論」
- ⑥ 明治前期自由民権運動にみる両藩の小楠路線継承と異同性
- ⑦ 小楠思想の国際社会観と近代日本を見通した小楠哲学の意義

これで明白なように、本書はまず当時の小楠思想の研究の深まり、特にその経世論や国際社会観を踏まえた開明性、普遍性を再確認する。その上で小楠の政治・社会論に対し幕末の福井藩と熊本藩、近

代福井県と熊本県がどう対応したかを探り、その「異同性」を追求した。軸足は福井にあるが、熊本と福井それぞれが小楠思想をどう理解し、実践的にどう継承したかを対比したところに特色がある。終章によれば、共に「真の近代化」を目指す「下からの近代化」の政治社会像を懸命に追求したものであった。このようにして氏は、小楠の政治思想や経世論が机上に終わらず、明治期の福井、熊本では実践的に受け継がれたと確信をもった。

その後、先に紹介したように、小楠の思想や人物像を説いた一般書二冊を刊行する。かれの思想は二〇〇〇年代に入り一つのブームとなるが、三上氏の仕事はその点でも一定の位置を占めたと思われる。

三上氏はすでに示した通り、他にも『松平春嶽のすべて』、『由利公正のすべて』を編著で出し、二〇〇四年には著書⑫『幕末維新と松平春嶽』を出版した。⑫が最後の著書であるが、本書は一般書ながらそれまでの研究成果を集約するような、思いのこもった内容といつてよい。そのことは本書が「第一章 雄藩への進展」から「第五章 維新政権へ」へと続き、「第六章 近代日本への英知」で締めくくられていることから窺える。もつとも、第六章のタイトルからもわかるように、学問的な面よりも、人生観を込めた啓蒙書の色彩が濃い。そのことは春嶽を、『日本近代化』の望ましい議會制統一国家を真剣に追求した人物と称え、かれの「類いまれな啓蒙力に精いっぱい照明をあてる」ことを本書の課題とする、と述べている点にも現れている。

四 研究の成果と今後の課題

(一) 三上氏の到達点

重ねていうが、三上氏の研究業績は多大なものがある。研究のフィールドを一貫して福井に置き、幕末の福井藩が明治維新に深く関与して公武合体運動や公議政体論を主導したと意義づけた。しかもその精神は近代にも継承されて一定の役割を果たしたと結論づけているところに特長がある。特に力点を置いたのは次の点だろう。

①幕末の福井藩は安政期に藩政改革を成功させ、「雄藩」として台頭した。

②横井小楠の思想指導によって「民富論」「富国論」を重視した殖産興業策を成功させ、政治的には公武合体路線による内外の危機打開をはかった。

③公武合体運動は幕府保守派と討幕派の前に破れたが、福井藩が主導した殖産興業策と公議政体を目指す運動は、幕末維新时期を一貫していた。

④「五か条の誓文」由利案とかれの明治二年四月「建議書」は、「公議輿論」尊重の政治路線を「民衆層のレベルにまで下降させる方向」が追求されていると評価した。

⑤福井の近世から近代を統一的に把握し、橋本左内・由利公正・松平春嶽の思想や役割を高く評価した。また、横井小楠の思想がもつ卓越性を確信し、その今日的意義を強調した。

三上氏の論考はその独自性もあって大方の関心をよんだと思われる

る。管見の範囲では、②『公武合体論の研究』に対する当時の書評はおおむね好意的な受けとめ方であった。^①それは⑩『横井小楠の新政治社会像』についても同じである。^②

もっとも、そこにはかなりの問題を含み、様々な課題があることも事実である。以下、そのことを述べて筆者なりに三上氏の業績を継承し発展させる道を探りたいと思う。

(二) 今後の課題

課題は業績の受けとめ方によって異なってくるが、ここでは筆者の関心から思いつくままに主なものを挙げてみる。

まず第一は、高木不二氏の研究との対比である。高木氏は学生時代より横井小楠と幕末福井藩を素材に明治維新の研究に取り組んできた。発表論文は多数に上り、それらは二〇〇五年刊の一般向け著書『横井小楠と松平春嶽』（吉川弘文館）、及び二〇〇九年の研究書『日本近世社会と明治維新』（有志舎）を通して確認できる。

氏の研究は三上氏『公武合体論の研究』（初版）を追うようにして始まったが、研究視角が福井藩・松平春嶽と幕府崩壊との関わり方に重点を置いており、分析や評価の仕方も多くの点で差異がある。ただし、高木氏の場合、時期を細かく区切って天保・弘化、嘉永・安政、文久、慶応と分け、各時期の内容を綿密に分析している。その上で各時期の矛盾や特長をまとめ、具体的かつダイナミックに福井藩幕末史を展開しており、必然的に各所で三上氏の見解に対する批判ともなっている。また独自に多数の史料を発掘精査し、注目す

べき新たな事実や知見を各所に加え、説得力ある所論である。例えば、慶応二年四月、福井藩と鹿児島藩が交易協定を結び、福井藩は一七万両の資金を受け取るようになった事實は、従来全く知られていなかった。それを押さえて慶応期福井藩と松平春嶽の動向を論じる所など、まさに圧巻といえる。その意味で三上氏についても史料に戻って検討することが求められる。

高木氏は三上氏の研究姿勢にも批判的である。³⁾三上氏は福井に在住して地域の制約を受け、偉人顕彰的研究となつていくとの指摘である。この点を実際、幕末福井藩政を好意的に論じ、それらを担った橋本左内・由利公正・松平春嶽などを常に高く評価している点、やむをえない所がある。三上氏の研究方法についても言及しており、後に続くわれわれはそれらにも大いに留意すべきであろう。⁴⁾

第二は、三上氏の問題意識や方法論の問題である。氏は基本的視角を当時有力であつた「絶対主義への傾斜」論に置き、そこから「雄藩」連合による統一国家を目指す「公武合体論」、次いで「公議政体論」へと導いていった。だが、「絶対主義論」は今や過去のものとなつている。同じく「公武合体論」も概念規定が明確でないことからあまり取り上げられない。公武合体派か倒幕派か、という対立のみで維新変革を論じることを疑問視する研究者が多く、視点や研究方法も多様である。

したがって新たな視角が必要であるが、筆者はここでは、福井という地域に立脚した視点が大切と考える。三上氏が立論の基盤とした原点である福井にもどり、地域の立場から改めて統一的な幕末維

新史を展望できないだろうか。もちろん、それは偏狭な地域主義ではなく、学問的にも十分に批判に耐えるものでなくてはならない。そのことで注意したいことがある。それは三上氏や高木氏を含め、全国の研究者が福井藩を論じる場合、これまではたいてい「越前藩」と呼んできたことである。幕末政治史の史料ではそれがふつうだし、鹿児島藩を薩摩藩、萩(山口)藩を長州藩と呼ぶのと同じで、特に他意はないかも知れない。しかし、越前には敦賀郡を除いても、福井藩以外に鯖江・大野・勝山・丸岡の独立した各藩がある。福井藩を「越前藩」と呼ぶことは、これらの諸藩を必然的に無視することにつながる。

関連してだが、高木氏は慶応三年の大政奉還以後、春嶽が前記越前四藩との関係を深め、同四年三月には「越前国諸侯連合」を構想したと指摘した。⁵⁾筆者も賛同するが、実はこれも高木氏が触れているように、福井藩は早く安政期から大野藩の藩政改革に注目し、その後の殖産興業策推進等にあたつて同藩との交流を強めていった(大野・内山家文書)。横浜交易では勝山藩との連携も垣間見える(勝山・松屋文書)。それらを考慮するだけでも、「越前藩」という呼称は避け、福井藩の動向を越前地域の中で再検討していくことが重要と思われる。そこから改めて春嶽を含む統一的な福井の幕末維新を展望してみたいものである。

第三には、安政四年を中心とする藩政改革についてである。三上氏は改革を橋本左内以来、安政六年まで広げて、財政・教育・軍事、それに殖産興業策に至るまで成功を収めたとする。横井小楠路線は

その継承であったとし、万延期以降もその延長上で語っていく。対して高木氏は当該期の諸矛盾を明らかにし、明道館教育は挫折し、財政問題は基本的には解決されず、改革は藩内抗争を引き起こしたとする。小楠路線はその矛盾克服から出発しており、万延期以降も新たな矛盾に直面しつつ展開したとの説である。両者の見解・評価にはかなりの開きがあるわけだが、高木氏の考察は史料を分析して説得力に富む。

ただし、ここで筆者が懸念するのは、安政四年正月から四月にかけて実施された職制・民政・財政に関する改革を、両者ともにあまり重視していないことである。けれども、これは藩士に対する家格にとらわれない役職の登用・降格、代官領の半減及び郡奉行支配の再編成、財政方と預り領を含む郡方との統一、町在札所元締解任など、家格と職制の分離、民政・財政部門の整理統合や再編成など、藩政の抜本的改革を目指すものである。もつとも、それらのほとんどは安政五年の春嶽隠居とともに撤回されたためか、あまり注目されなかった。だが福井藩がその後幕政改革を強く要求したことを考えると、この件はその前提としても検討する意義があると思われる。

第四は、由利公正と殖産興業策に関する問題である。周知のように由利は福井藩殖産興業策の推進者として有名である。藩財政改革のため「製造方切手五万両」を発行させ、生糸など領内産物の集荷・販売を一手に行う「物産総会所」を設立し、特に長崎交易を推進して大きな成果を挙げたとされる。三上・高木氏もこれらを大筋で認め、それを前提に由利を評価し、指導した小楠を含む万延・文

久期以降の藩論の展開へと向かっている⁶⁾。けれども、これも周知のように、論拠とするのは由利自身が晩年に語ったところをまとめた伝記のみであり、実証すべき史料はほとんど見出せない。このことに関し、筆者は、「切手五万両」の件は確認できず、「物産総会所」は「産物会所」のことであり、また長崎交易の成果も不明だと指摘した⁸⁾。更なる検証を痛感するが、いずれにしろ予断を含まず由利伝記を含む多方面からの再吟味が必要である。

第五は民衆の動向である。この件に関して史料が不足することもあり、両氏ともわずかに触れているに過ぎない。しかし、幕末維新时期は「世直し状況」とも称される混乱した時代であり、研究には民衆の動向把握が欠かせない。特に三上氏の場合は横井小楠の「民富論」路線を重視しており、その見地からも重視すべき課題のはずである。

付記すると、三上氏は天保期までの福井藩は財政難から専売制をして民衆からの収奪を凶ったが、対して小楠路線による専売制は、限界はあるものの「民富論」を基調に実施されたと評価した。しかし、同氏がその点を領民の生産と流通の場に立って具体的に分析した形跡はなく、評価はあくまで推測に過ぎない。したがって、これらを含む民衆の動向を具体的に確認することが求められる。

第六は第五に続くもので、明治初期領内の生産と流通、及び領民の動向である。三上氏は『公武合体論「改訂版」』第二篇第四章において、公議政体論が福井藩では藩論として「憲章化」されたとした。そして、これに基づいて藩政改革が実施されたとする。幕末期に「予期以上の成果」をあげた物産振興策の機構を、明治元年九月に「改

変」し、新たに「福井惣会所」として開設したと、由利公正の財政策と関連させつつ紹介している。しかし、「惣会所」が設置されたことは明白として、説明はあまりに簡易であり、具体的な運営やそれと関わる生産や流通については何ら触れていない⁹⁾。故に是非取り組み検証すべき課題と考えたい。その際、明治三年八月に起こった武生騒動についても注意したい。この騒動では武生の福井藩民政寮出張所や惣会所惣代役宅なども打毀しの対象となっていた。これらを抜きに明治初期の福井藩公議政体を論じることはできないと思うのである¹⁰⁾。

こうして挙げればまだまだ挙がってくるように思われる。よってここでは史料の利用を述べて最後としたい。簡単にいえば、福井の幕末維新史に関する史料をもっと活用しようという、ごく当たり前の提案である。

三上氏が研究を開始した一九六〇年代は、未だ藩庁関係などの史料公開があまり進んでいなかった。氏の場合やむなく多くを戦前の翻刻史料や編さん物に頼るしかないのが実状であった。

だが、今日では同氏の時代と比べ古文書等の史(資)料公開が格段に増え、また史料の翻刻も随分と進んでいる。多くの藩政史料を所蔵する松平文庫(福井県立図書館寄託)や春嶽公記念文庫(福井市立郷土歴史博物館蔵)等の文書目録が整備され、多くは直接確認することが可能である。『福井県史』・『福井市史』等の各自自治体史(誌)の刊行もほぼ出そろった。更に福井県文書館や福井市立郷土歴史博物館が開館し、研究環境は驚くほど整ってきている。

おかげで未整理の新史(資)料が発見されたり、新たな知見が報告されることも増えてきた。一例を示しておこう。幕末藩政史の展開を見るには、当該期家臣団の人事関係記録の確認が必須だが、幸い松平文庫には福井藩のものがかなりまとまって残されている。しかし、量の多さもあって読破は容易でなく、長くつまみ食い程度に利用されるに過ぎなかった。

ところが、高木不二氏は人事履歴記録である「旧藩制役成」¹¹⁾によって重要な事実を見出した。これを丹念に追った結果、それまで兵器製造を担当していた製造方役人が、いずれも安政五年十一月十六日に「制産方」に役替えとなったことを確認したのである。「制産方」はそれまでの研究では全く知られていなかった役所であり、氏自身後にこれを「発見」と呼ぶほどであった¹²⁾。「制産方」設置の結果、軍制改革が停止され、藩政改革全体は横井小楠の指導する殖産興業策へと転回し、それが文久期に続いたのである。

したがって、高木氏のように人事記録を詳細に検討するならば、そこから新たな福井幕末維新史が開けてくるかも知れない。事実、人事記録を徹底して分析し、優れた成果をあげた研究がすでに教育史関係で現れている¹³⁾。

同様にして他の諸史(資)料による新たな研究も進みつつある。例えば文久期の横井小楠と由利公正、それに坂本龍馬の福井城下における動向など、随分と正確に確認できるようになってきた¹⁴⁾。その史料で注目されるのは春嶽の側面頭取が毎日のかれの動静を克明に記した「御用日記」(松平文庫)である。この史料は安政六年から

慶応四年の一〇年間にわたっており、春嶽の公私にわたる生活を知る上でも大変有益と思われる。

なお、史料に関しては福井県文書館の積極的な取り組みにも注目したい。同館では二〇一〇年以來「松平家譜」（越葵文庫、福井市立郷土歴史博物館寄託）に取り組み、「慶永」分を翻刻して『越前松平家家譜 慶永』全五冊を刊行し、一三年からは幕末維新期の人事記録（松平文庫）をまとめた『福井藩士履歴』の刊行を進めている。また、春嶽の「御用日記」は写真複製本のほか画像データ公開も行っている。これらを通して今後全く新たな福井の幕末維新像もいつか展望できるのではないかと期待するものである。

おわりに

三上氏の研究に学び、それらをどう今後につなげ、福井の歴史を豊かにできるかを考えてきた。驚嘆すべきは福井という環境で、しかも公務を抱えつつ、実に精力的に歴史研究に邁進してきた氏の強靱な姿勢である。積み上げられた膨大な業績を前には、ただ脱帽するばかりである。

氏はまた強い現代的な問題意識―民族問題や平和、民主主義―をもち、史料を博搜して歴史像を描いてきた。研究の成果を中央の研究史の中に意義づけようとしたことも重要である。こうして氏によって福井の幕末維新史は初めて全国的な研究の中に組み入れられ、われわれも大いに学ぶことができるようになった。民衆への視

点を常に大切にしていたことも氏の特徴であった。歴史を単に支配の枠の中だけや、社会現象としてみるのではなく、歴史的存在としての民衆の向上を常に重視し、だからこそ小楠の民富論に傾倒してやまなかったのである。

とはいえ、郷土愛、郷土の誇りを強く掲げ、研究そのものも多くの批判面を持ち合わせていたことはすでにみてきた通りである。そのことを直視しつつ、氏の業績を継承・発展させたいものである。

註

(1) 管見の範囲で書評は次の通りである。

舟澤茂樹「三上一夫『公武合体論の研究』」（『若越郷土研究』二四巻五号、一九七九年）。

毛利敏彦「三上一夫著『公武合体論の研究』（『歴史評論』三六六号、一九八〇年）。

入交好脩「三上一夫著『公武合体論の研究』（『社会経済史学』四六号、一九八〇年）。

井本三夫「三上一夫著『公武合体論の研究―越前藩幕末維新史分析―』によせて」（『日本海地域史研究』第四輯、文献出版、一九八二年）。

山本弘文「三上一夫著『公武合体論の研究―越前藩幕末維新史分析―（改訂版）』（『土地制度史学』一三六号、一九九二年）。

(2) 沖田行司「三上一夫著『横井小楠の新政治社会像―幕末維新変革の軌跡―』（『日本史研究』四一九号、一九九七年）。

(3) 高木不二「横井小楠と松平春嶽」（吉川弘文館、二〇〇五年）の「はじめに」参照。なお、同氏には書評「三上一夫『幕末維新と松平春嶽』（『明治維新史研究』一号、二〇〇四年）がある。

- (4) 三上氏への批判は早く前掲井本氏書評でも出されている。
- (5) 前掲『横井小楠と松平春嶽』二〇一ページ。
- (6) ここで「大筋」というのは殖産興業策・富国策のことである。高木氏は財政問題については、安政・文久改革でも根本的な改革がなされず、前述の慶応期鹿児島藩との交易開始は元治期の赤字財政とその後の軍備増強策が背景にあると説明している(同氏前掲『日本近世社会と明治維新』第三章)。
- (7) 三岡丈夫編『由利公正伝』(光融館、一九一六年)、及び由利正通編『子爵由利公正伝』(一九四〇年)。
- (8) 拙稿「幕末期、福井藩の殖産興業策について―産物会所の成立を中心に―」(『福井県地域史研究』一一号)、及び同「幕末期、福井藩の他国交易について―横浜・長崎・下関における―」(『福井県地域史研究』一二号)。
- (9) 三上氏の明治初期農村分析に関わるものとしては、「明治初期農村の諸職業―越前・川西地区を中心に―」(前掲⑥『日本近代化の研究』第三章)があるが、内容は詳細ながら単なる分析に終わり、「民富論」などとは切り結んでいない。
- (10) 三上氏は『福井県史』通史編5「近現代一」の第一章第一節四項で「武生騒動」と題してこの問題を執筆したが、氏の研究との関連には直接触れていない。
- (11) 『福井市史』資料編5「近世三所収(福井市、一九九〇年)」。
- (12) 高木不二「解説」(『福井藩士履歴三 けくそ』(福井県文書館資料叢書 一一、二〇一五年))。
- (13) 熊澤恵里子「幕末維新期の福井藩政改革と藩校―地方教育史研究の視点から―」(『福井県文書館研究紀要』一、二〇〇四年)、及び同「幕末維新时期における教育の近代化に関する研究」(『風間書房』二〇〇七年)。
- (14) 吉田健「由利公正と福井藩」(『由利公正生誕一八〇年記念 笠原白翁生誕二〇〇年記念歴史講座講演録』福井市(財)福井市歴史のみえるまちづくり協会、二〇一〇年)はそのよい例である。なお、吉田氏には他にも新

史(資)料の紹介やそれらを用いたすぐれた研究が少なくない。

(付記)

本稿の執筆に取りかかろうとしていた矢先の当年五月三日、福井県史研究会会長・吉田健氏が逝去された(享年六十八歳)。氏は福井県史・福井市史両自治体史の近現代史部会調査執筆員を務め、またその間福井県史の編さん事務局にも長年勤務するなど、三上一夫先生とは大変近く、いわば車の両輪のごとき立場で活躍してこられた方である。更に福井県史編さん事業の終了後は福井県文書館の創設に取り組み、古文書の整理と公開の体制を確立するとともに、歴史研究者としても多大の業績を残された。氏のご功績をしのび、心からの哀悼の意を表する次第である。